

幼稚園のある一日



四月

内田 和子

一、はじめに

期待と不安に満ちた幼児を迎えて、今年も一年が始まった。

つい先日、私のもとから幼児を一年生に送りこんだのであるが、それ以来、待ちに待った新しい幼児を迎え、私自身も新しい期待に胸ふくらませるとともに、一方では、どんな幼児たちがくるのかしらという思いが通りすぎるのである。

両親の愛と保護の中で安心して生活していた幼児がはじめての集団生活にとびこんでくるためには、幼児たちは、まず、自分を受け入れてくれる人を要求しているであろう。そこで、私は、まず教師と幼児のあたたかい心のふれあいを前提にして、一日も早くひとりひとりの幼児が、安定して活動できるように、また、ひとりひとりの幼児が満足して活動できることや、友だちの感情も受け入れてあそべるようになることを念願するとともに、そのために、幼児たちにとって、かけがえのない教師にならねばならないと思うのである。

そこで、四月の幼児の姿を私なりに考えてみた。

① 集団の中で安定した気持で活動するようにする。

・ 必要なことは、自分から教師にいう。

・ 自分から活動に入る気持にする。

② 身のまわりの始末は、自分でできるようにする。

・靴の出し入れ

・もちものの始末

・手洗い、鼻かみ、用便の習慣

③ 集団生活に必要な最小限のきまりを守るようにする。

・遊具を友だちと使う。

・順番を守る(交代する気持ちになる)

④ 新しい環境に慣れ、喜びと興味を感じさせる。

つきに、具体的にある一日について述べてみたいと思う。なお

私の学級は五歳児、一年保育、三十三名である。

二、実践例

(1) 月日 四月十四日(火)

(2) 前日の活動

・朝のあいさつを先生とかわす。

・すきなあそびをみつつけて、活動する。

・ブロック・レールセット ・ままごと ・粘土 ・絵画

(以上室内活動)

・ボール ・チェンネット ・平均台 ・砂あそび(以上声外活動)

。みんなで紙芝居「三匹の子豚」をみる。

(3) 本日のねらい

安定感をもって活動する。

(4) 実践

「自分を受けとめのばしてくる先生がいる」と、張り切って登園してくる幼児にとって、朝の教師との出会いは、その日の活動に大きく影響する。

登園してきた幼児が、安心して自分の生活の中にとりこんでいけるように、教師は、ひとりひとりの幼児の要求を直接にふれて判断してやらねばならない。これが朝の幼児との出会いであろう。ある幼児は、教師の身体的接触(頭をなげる、手をとってやる、だいてやるなど)により親密感を味わい、ある幼児は、教師と目と目があうことで、また、ことばを交わすことで安定し、自分の生活にとりこんでいく構えができていくのである。それは、幼児の心と教師の心の通じあいであり、心のふれあいでもある。幼稚園の一日は、このようなひとりひとりの幼児との出会いで始まる。

それで、「今日は、どんな楽しい顔をしてきてくれるかしら」と、自分自身の心をあたたかいものにしながら白紙の気持ちで幼児の登園を待てるように自分にいいきかせて、保育室で幼児の登園してくるのを待つことにする。

八八・十五V

まず、H男が走って部屋の中に入ってくる。教師「Hちゃんおはよう、今日は一番早くて、えらかったわね」と、話しかけると、Hは、恥ずかしそうに赤い顔をして、おたより帳をさしだし、服を着替えに行く。少々教師の方が、気負いすぎたのかなと恥ずかしくなる。

「先生おはよう」と、顔面喜びに満ちて、S男とY子が入ってくる。教師もつりこまれて、「おはよう」と、元気よくあいさつをする。

O男は、はつきりときちんといわなくては気がすまず、「先生おはようございます」と、ていねいにあいさつをする。これを聞いて、S子やK子も見習ってきちんといさつをする。

小さい声でことばをかけてくれるM男、体ごとぶつかってくるT男、ただだまって、にこにこ笑っているN子、みんな元気に登園してくる。今年の幼児たちは、みんな元気というのか、社交的というのか、入園以来、親からはなれず泣いているという状態の幼児は、ひとりもない。順番におたより帳をあずかりながら、みんなの顔を見ていて、話などしていると、S子は、教師の髪の毛をなぜながら「先生の髪とおかあさんの髪と、どっちが長いかなあ」と、話しかけてくる。「さあ、どっちかな」と、返事をしているうちに、「先生外へ行ってあそんでくるわね」と、安定し

た顔で元気よく園庭へでて行く。

八八・四〇V

全員が登園をすませ、どうにかあそびだしたようである。S子とN子は、集団生活に慣れにくく情緒不安定で、なかなか自分からとびこんでいくことができないが、教師といっしょなら喜んで活動できるので、どのような活動をするか少しようすをみることにする。

★レールセット

レールセットは、構成遊具のひとつであり、ひとりでも十分満足してあそぶことができるとともに、そのようなあそびを通して、友だちとの関係も作りやすい遊具である。つまり、幼児たちは、自分の感情を満足して安定感をもつとともに、その中で、友だちと接触したいという要求を満足することも、きわめて自然の遊びの中で可能になってくるのである。また、この遊具は、家庭にもあるおもちゃなので、幼児たちも気がるに取りくめるので、人気がある。S男N男N男W男の四名が登園するとすぐレールセットをもちだしてあそんでいる。

みんなそれぞれに汽車をもち、それぞれがレールを組立ててひとつの机であそんでいる。あまり広い場所なので、すぐ机の上は、レールでいっぱいになり、友だちのとぶつかってしまう

が、O男とN男は、そのたびに顔を見合わせ、だまって手を休めている。しかし、S男とW男は、ほがらかな性格のためか「きみとぼくのつなごうか」「うん」と、話をしながらあそんでいる。教師もN男とN男たちもこの遊具を通じて友だちが作れたらと思い、レールをもって仲間入りをし、「Oちゃんの線路と先生の線路とつないであそばない」と、話しかけると、N男は、だまって教師のいうとおりつないでいる。「NちゃんもOちゃんのとつないだらどう」と、誘いかけると、O男もだまってつなぎだす。S男たちも「ぼくも仲間に入れて」と、いつてくる。

教師は、四名が仲よくあそべるように、机の上のレールを整理しながら、ようすをみていると、O男とN男の汽車がぶつかつた。ふたりは、にこりと笑ひ、N男はバックをしてみた。S男が「Nちゃんこの鉄橋わたりな。何も通らないよ」と、話しかけている。N男は、うれしそうに、「うん」と、返事をして、汽車を動かしていく。W男「Sちゃん、ここから線路まげてもいい」と、たずねている。

どうやら、四名は、ちょっとした教師の誘いかけから、汽車を通してあそべるようになったようである。

★ボールあそび

入園以来一週間もたっているのに、幼児たちは、自分たちで自

由に戸外へでるようになっていた。元気のよい女児六名が、外でボールつきをしている。おとなしいW子はボールをだいて立っている。W子は、まだボールにも慣れていないらしく、何とはなくさみしそうである。「Wちゃん、先生とボールのうけあいっこしましょう」と、誘いかけると、W子はうれしそうにそばによってくる。

そこで、W子とふたりで向かい合い、ころがしっこをする。W子は、うれしそうに教師のボールを受けとめて、また、ころがりかえしてくれる。このようすをみた他の幼児たちも教師のもとによってきて、「先生、私としても」と、それぞれが、自分のもつてきたボールをころがそうとするので、教師といっしょにあそぼうとよってきた幼児の気持はうれしく思ったが、「ちよつとまつてね、先生は、ひとりでしょう。だから順番にしましょうよ」と、いって、よってきた幼児たちを少し間をおいて、ひとりずつわらせる。幼児たちは、どうするのかと期待をもった顔で教師に従った。「さあ、このボールで、Aちゃんから順番にころがすわよ」と、いって、A子の方にボールをころがしてやると、他の幼児も受けとめに入ってくる。

まだ、幼児たちは、自分が先生とあそびたいという気持が強いのだなあと思っていると、さっそく幼児たちは、「先生私のボールでしてなあ」と、それぞれ自分のもつたボールでころがしっこ

をしたいといい、順番など無視して、ころがしてくる。

先生といっしょに私のボールであそびたいというすなおな気持ち
がうれしく、幼児の気持ちを満足させたいと思ったので、しばらく
あそんだが、一度に二個や三個のボールがころがってくると、教
師もさびききれないし、それぞれの幼児も満足することもできな
いので、「ねえ、みんなこれではおもしろくないでしょう。ひと
つのボールで仲よくあそびましょうよ」と、話しかけると、B子
D子は、「わたしのボールやで仲間にするのはいや」と、いつ
て、ボールをかかえて、不満顔で走りだし、少し離れた場所でも
りつきをはじめた。せっかく友だちとあそぶ機会を作ったのに、
B子やD子は、自分のボールで先生とだけあそびたいという要求
が強く、教師の気持ちを受け入れてくれない。

そこで教師は、このあそびに対して完全にお手あげの形になっ
たが、この時期には仕方のないことで、幼児たちは教師との一对
一の接触を強くのぞんでいるのである。だから、そのような幼児
の感情を大切にしてあげなければいけないと思った。このような
すなおな気持ちを教師に示してくれたことに對して大へんうれしく
思い、これでいいという満足感もあった。

しかし、満足のいくまで一对一で要求を入れてあそんであげる
べきであることは十分わかっているが、友だちとあそぼうという
気持ちになりはじめた幼児もいるので、やはり教師がいっしょにあ

そんであげないとうまくあそべない。この両方の要求を一度に受
けとめることができないので情けなく思う。B子たちは、まりつ
きをはじめたので心残りはするが、他の幼児とあそぶことにす
る。入園当初は、よくこのような場面におつきり、教師として苦
しむのである。

教師とあそびだした四名は、順番にうれしそうにころがしつこ
をした。この四名は、友だちとあそぶ楽しさがわかってきたらし
い。教師は、離れていった幼児たちを気にしながら、ころがしつ
こをしていると、さっき離れていったB子がボールをもって、
「先生、わたしといっしょにバレーボールしよう」と、いつてき
た。「そうね」と受けてから、「Bちゃん、ちょっとまってね」
と、いつて、ころがしつこをしている幼児たちに、「あなたたち
じょうずになったわね、今度は、あなたたちでやってごらんなき
い」といつてから、B子とバレーボールをする。

テレビの影響でB子は、いろいろのスタイルを知っていて、今
度は、教師と一对一なので満足してあそんでいる。友だち同士で
あそぶことのできない幼児、また、あそび方がわかれば友だちと
仲よくあそべる幼児と、それぞれに違うが、まだお互いに結びつ
きができないために教師に依存的であり、ひとりひとりが教師と
自分の遊具であそびたいという強い要求をもっている。この要求
を満足させ、大切に育てていけば、やがて、幼児も安定し自信を

もって友だちと活動するのではないかと思われる。

★平均台でジャンケンあそび

昨日からテラスに二台の平均台が出してあり、昨日も数名の幼児とあそんだのだが、今日もY夫が、昨日のジャンケンあそびでできた新しい友だちのU夫C夫たちと二組に分かれてあそんでいる。勝負の意識は全くなく、友だちといっしょにあそべるのが楽しいらしい。負けると自分のすきな方に戻り、また、やっていると、見ているとても楽しそうである。もっと友だちをふやして、楽しくあそべるようにと思い、そばでみているK子やS夫を誘って仲間に入れてもらう。

S子もそばで友だちのあそんでいるのをじっとみつめているので、いっしょにあそびたいのだろうと思ひ、「Sちゃんも仲間に入らない」と、教師が誘いかけると、S子は、きつきと逃げて部屋の隅の方いき、すわってうつむいてしまった。S子は、家庭生活し経験しておらず、近所に友だちもなく、はじめての集団生活に緊張の連続であることをよく知っているながら、急に誘いかけたうかつさを反省するとともに、しばらくS子のようすを見守ることにした。そして、何くわぬ顔でジャンケンあそびを続けた。

「先生、おとなでもジャンケン負けるの」と、教師が負けると

ふしぎそうにたずねてくるN夫に、「そりやおとなだって、子どもだって同じよ」と、返事をする、にっこりと笑う。元気のいいかけ声に誘われて、四名ほど集まってみている。友だちのあそんでいるようすをみて、「グーだせ」「ビィだすで負けるのやないか」と、D男は、世話をやき、自分も仲間入りしたつもりで楽しんでる幼児もいる。

教師は、この四名のようすを見守りながら、あそび方がよくわかるように少々大げさな動作とことばを使いながらあそび、しばらくしてから、「きみたちも仲間に入れてあげましょうか」と、声をかけると、うれしそうに「うん」と、いって、喜んで仲間入りをする。

S子は、まだ、しゃがんだままじっとして、時々こちらのようすをうかがっているようである。やはり、こちらのが気になっているらしい。やはり、いっしょにあそびたいのだなあと思ひ、思いきってS子のところに行き、「いっしょにあそびましょうよ」と、S子の手を教師がひいて仲間入りをする。そして、教師の前にS子を入れてみた。他の幼児よりテンポは遅いながら、順番がくるとS子もジャンケンをする。負けたのでどうするかとみていると、逃げださず自分で一番うしろのところに並んだ。やはり、友だちとあそびたい気持は十分あったのだなあと教師自身も安心した。負けたN夫が後にきて、S子の前に並んだ。N夫

も全く悪気がなくにこにこしている。S子もだまっている。そこで、I夫がつきにうまく並べたので、「Iちゃん、うしろへじょうずにならべたわね」とほめてあげると、U夫も気づいてS子のうしろへ並びなおす。

二回目にS子がジャンケンをした時も負けたが、表情も変えずさっさとうしろに並びに行った。あそび方がわかってきたのだなと思いつつながら、つづけていっしょにあそんでいると、三回目にジャンケンの番がまわってきたS子は、Y夫とあたり、同点でふたりともハサミをだした。Y夫は、「同時間、もう一回しよう」と、S子にいう。つづけて二回も同じなので、S子は、「いつまでもいっしょやわ」と、口をおさえ、体をかがめて笑いだす。「ほんとにおかしいわね」と、教師もいっしょに笑うと、Y夫もつられて笑いだす。

ふしぎなことに、それから、S子の表情は明るくなり楽しそうにあそんでいる。やっと安定して友だちとあそべるようになったようでほっとする。このあそびは、メンバーがよく交代するが、S子は、最後までつづけてあそんでいた。

保育室で、ままごとをしていたK子A子が、「先生、ごちそうができましたよ。たべにきてちょうだい」と、よびにきたので、K子たちのところへいこうとすると、C夫が、「先生は、よばれとすぐその子のところへいくであかんわ」と、不満をもらす。

C夫に「すぐもどってくるからまってね」と、いうと「いや」と、いう。「それならいっしょにKちゃんのところへいってごちそうにならない」と、いうと、「ぼくは、ままごとみたいのきらいやもん」と、いい、「もうやめた」と、いいながら、園庭へ走りだした。

K子たちは、早く早くと手をひっぱって、ままごとの方へつれていこうとする。やはり、C夫にとってもK子にとっても自分ひとりの先生であってほしいのである。やはり、ひとりひとりの幼児を十分満足させてあげることがもつとも大切なことであろう。そのためには、毎日毎日が大切であり、その中で次第に、幼児たちもしだいに人間関係を深めていくのではないかと思ひ、K子にひかれて、ままごとの家へ行く。ふたりは、たいへん喜び、粘土で作ったごちそうを「どうぞ、どうぞ」と、いって、すすめてくれる。「おいしそうね」と、いいながら、近くにいたM子も誘って、ふたりでたべる。

△九・三五▽

★映画ごっこ

平均台であそんでいたS男とT男は、手洗場でうれしそうに相談をしている。教師もS男とT男が友だちになり、あそびの相談をするようにまでなつたことをうれしく思ってみていると、ふた

りは、肩をくんで、「映画するからみにきてください」と、いいながら、テラスのところを歩いている。「何をするのや」と、R男がよって行く。「タイガーマスク」と、S男が答える。三名は、保育室に入り、「早く椅子ならべよう」と、S男の発言でR男を含めて三名で椅子をならべだす。これを見て女兒三名がその椅子にすわりこむ。

S男たちは、お客さまの少ないのにも気にせず「さあ、はじめよう」と、話し合っている。教師は、どのようにしてあそぶのかと興味も手伝いお客さまになりすわりこむ。T男「ぼくは、タイガーマスクになるわな」と、いうと、S男は「ぼくは、ジャガー」と、話をしながら廊下にていく。そして、うれしそうなお顔で、話を廊下からだして、お客の方をみている。

教師は、「もうはじまりますか」と、たずねると、それにつられて、T男「先生、オルガンひいて、はじめると、いう。

「何のうたをひくの」と、たずねると「何でもいいわ」と、返事をするので、タイガーマスクの歌を知らないことを残念に思いながらマーチをひくと、ふたりは、緊張した顔で入場してくる。そして、お客さまの前でプロレスをはじめる。

教師は、床の上ではあぶないと思い、マットを二枚もつてきて、「この上ですると本物みたいでしょう。ころんでもいいわよ」と、いうと、S男「ちょうどいいなあ」と、すぐに受け

入れてくれた。お客さまの幼児が「どっちがどっかわからんわ」と、いう。T男「ぼくがタイガーで、Sちゃんがジャガーです」と、説明する。すると、「タイガーがんばれ」「ジャガーまける」と、応援をはじめた。このさわぎにだんだん幼児たちも集まってくる。S男たちは、人に見せるといふよりむしろ自分たちで楽しんでいるようである。

T子N子らの六名の女兒が「先生、わたしらもやらせて」と、いつてくる。「そうね、何をしてみせてくれるの」と、たずねると、「アタック・ナンバーワン」と、T子が答える。「では、Sちゃんたちのつぎね。ちょっとまってね」と、いうと、六名は、S男たちがしたようにいそいで廊下にていき、はしゃいで待っている。

S男たちも十分たのしんでから、教師が、S男たちに「Nちゃんたちにも交代してあげてね」と、いうと、「うん」と、答え「先生オルガンひいて、退場や」と、いう。そこで、オルガンをひいてあげると、二名は堂々と退場していった。つづいて、六名の女兒がお客さまの前に立った。すると、A子S子K子の三名は、「はずかしいわ、先生わたしたち歌をうたうのにするわ」という。「そう、では、バレエのつぎにしてね」と、いうと、廊下のところへ戻って行く、残りの三名は、二組に分かれ、「そうれ」「はい」「はい」「ファイト」などとかけ声をかけ、バレエボー

ルのまねをしている。みている幼児も「ファイト」と、声援を送っている。

戸外あそびをしていた幼児たちも十分それぞれの活動に満足したのか、みんなこの活動をみに集まってきた。

教師は、この活動をみんなで楽しみたいと思い、司会の役になり「では、つぎにKちゃんたちどうぞ」と、いうと、三名は、手をつないでチュウリップのうたをうたった。「おじょうずでしたね」と、ほめてあげると「今度は、ほくにさせて」などと元気のよい者ができてうたってくれる。お客さまの中でこの活動に興味がなくなった者もでて、ぎわぎわしてきたので、今度は、学級全体でする身体を動かす活動へと切り替えた。

△一〇・〇五▽

★リズムあそび

「今度は、みんなでタイガーマスクやアタック・ナンバーワンになって歩いてみましょうよ」と、教師が誘いかけ、みんながすわっている椅子を円形におきかえた。これは、幼児たちが情緒的にもまだ不安定のため、大きな円を作ってもすぐ中心によってしまつて、十分身体を動かして歩けないので、椅子で円形を作り、その囲りを歩かせることにより、のびのびと動作させるためである。「さあ、タイガーマスクになって元気よく入場しましょう」

と、いうと、みんな元気よく歩きはじめた。しかし、まだ、不慣れのため前の幼児にくっついていたり、前があきすぎたり、全体の調子は、なかなかそろわないが、いっしょうけんめい曲に合わせて身体を動かそうとする態度がよくわかる。

学級全体でのリズム活動は、緊張が伴うので気分をやらわげるために、ゲームをすることにした。そして、その中で新しい友だちをできたら作ってあげたいと考えた。

それは、円の中央に椅子を一脚おき、周囲に幼児数より一脚たりないだけの椅子を用意し、曲に合わせて歩き、曲が止まると急いで椅子にすわる。しかし、一名すわることができないので、その幼児は、中央の椅子にすわり、それを繰り返して行なっては交代するといふあそびである。このゲームを通して、機敏に動作できる者や、まだ、学級全体で活動しているという感じがつかめない幼児、ただうれしくて、キャーと声をだして喜んでいる幼児などさまざまであるが、学級全体の活動の楽しさをしだいに感じとっているようである。

△一〇・一五▽

★帰宅の準備をする

降園の時もほとんどの幼児は教師の手を借りなくても自分のおもちゃを自分でできるようになった。作業着をR男は、くるくるとま

るめて、ロッカーに入れていた。そこで、教師が「Rちゃん、作業着は、こうしてたたんでしまうのよ。くしゃくしゃにならないでしよう」と、両そでを合わせてから折りたたむように、たたんで見せてあげると、そばで、やはりまるめてしまっていたH男もロッカーから出して、きちんとやりなおしている。幼児は具体的な行動の場で、他人の行動をみながら、学習していつているようである。帰宅準備をするのに個人差があり早い者と遅い者では、七、八分も違うので、ぼつぼつそろえていきたい。

八一〇・三〇〇

★降園

ジャンケンあそびの時いったC夫のことが、まだ、頭の中にひっかかり、C夫を先頭にして、教師と手をつないで帰る。

三、反省

今日も一日幼児の状態をおいかけて、あちこちと話をしかけたり、手をつないでいっしょに仲間入りをしてあそんだり、いっしょに作ったり、たいへん忙しい一日をすごしたが、果たして教師自身から幼児の中にとびこんで、幼児の心をとらえることができたのかと疑問が残る。

「先生は、よばれるとすぐその子のところへいくであかんわ」といったC夫の気持が、深く胸に残る。入園して、今日で八日目、まだまだ「先生といっしょにあそんでほしい」という要求も強い幼児たちである。そのひとりひとりの感情を時間をかけて満足させてやれば、幼児たちも安定して、友だちともあそぶようになるであろう。そのためにも時間と空間を十分にとった一日の生活リズムの繰り返しが必要であろうし、その中で教師と幼児の心のつながり、お互土の信頼関係がより深められていくよう努力すべきであると思った。

また、入園してまもないためか、幼児たちの活動の中に、ウォーミング・アップの時間が特別に長くいろいろな活動へよく変る幼児、また、逆にじっとひとつの活動にしがみついていることで安定感を求めている幼児などいろいろあるが、やはり、本当に自分で選んだ活動のできるように、教師も時間をかけて努力していく必要がある。もちろん活動のしかたのわからないこと、環境になじみにくいこと、友だち関係がうまくいかないことがその原因と考えられるが、教師として、このような幼児のひとりひとりの状態をよく把握して、いろいろの活動ができるように、十分の準備がなされねばならない。

やがて、幼児自身が、自ら活動する日のためにがんばらねばならないと思った。

(四日市市立下野幼稚園)